

映画『グリーンブック』を観て

池田義光

1 映画好き

私は年に20～30本近くの映画を観る。割と映画好きだと自分では思っている。そもそも学生時代から映画は好きで、ある時は、オールナイトで何かの特集があると1日で5・6本の作品を観ることがあり、年間で100本近くの作品を観たこともある。その頃の将来の夢の一つが映画監督になることであった。しかし、そのころは映画界の斜陽化が言われた頃で、ほとんどの映画会社の採用がなかった。日活はわずかに募集をしていたが縁故募集だけであった。東宝なら募集があるとのことで会社説明会に行ってみると、募集は不動産部門ばかりで映画部門はなかった。こうして私が映画制作の仕事につくことはなかったが、それから映画好きは続いた。映画を観て毎回思うことだが、どの映画もよくできていて、それぞれに良い映画が多い。最近観た映画では、『ボヘミアン・ラプソディ』と『アリー／スター誕生』が特に良かった。他に『カメラを止めるな』は脚本の良さが光った。『マスカレード・ホテル』や『アリータ～バトル・エンジェル～』も良かった。中でも最高だったのが『グリーンブック』である。

2 映画『グリーンブック』の素晴らしさ

映画『グリーンブック』で私が強く感じたことは、1962年当時のアメリカ合衆国の社会と人種差別のひどさと、この映画の素晴らしさである。この映画は2018年上映映画のアカデミー作品賞が当然と思えるくらい、何もかもがすばらしいのだが、中でも私が特に思ったのは物語・脚本と俳優と音楽の素晴らしさである。



演奏旅行中のトニー(左)とドン(右)

3 映画『グリーンブック』の描く時代背景

1962年当時のアメリカは「公民権運動」が盛り上がっていた。「公民権運動」とは、1950年代～60年代に全米を席捲した黒人（アフリカ系アメリカ人）などマイノリティが憲法で認められた個人の権利の保障と人種差別の撤廃とを訴えた運動のこと。このことに関して、かつて私は「夢の追求」の学校づくりをしていた頃に、キング牧師の生き方と「私には夢がある(“I Have a Dream”)”という演説のを知り、生徒たちに是非話して聞かせたいと考えて少し調べたことがあった。1955年のアメリカで、バスに乗っていたある黒人女性が運転手の指示を拒否して白人優先席を譲らなかったために警察に逮捕されるという事件が起こった。それに怒ったキング牧師が呼びかけたバス・ボイコット運動をきっかけに人種差別撤廃運動がアメリカ全土に盛り上がった。そして1963年のワシントン大行

進が起き、20万人の行列の先頭に立ったキング牧師は、有名な“I Have a Dream”の演説を行い、法案成立に大きなインパクトを与えた。その結果、1964年に人種差別撤廃をうたった「公民権法」が成立したのである。これによってアメリカでは少なくとも表だつた人種差別は無くなったのである。

従って、黒人ピアニストのドナルド(ドン)と運転手のトニーが南部演奏旅行を行った1962年は、「公民権法」成立以前で、激しい人種差別が公然と行われていた時代だった。白人と黒人でバスの席が違ふことや、トイレが違ふことやホテルが違ふことなど、南アメリカのアパルトヘイト(人種隔離政策)みたいなことはアメリカでも当時は公然と行われていてそれが合法であった。

そもそもこの映画の題名の『グリーンブック』は、人種差別が公然と行われてひどかった当時には黒人が泊まれないホテルや入れないレストランなどがあまりにもたくさんあったので黒人が利用できる施設を紹介した情報誌のことで、アメリカ南部を旅行する黒人必携のものとなっていた。この映画でも運転手トニーにレコード会社から渡され、トニーがこの緑の小冊子をもとに、ドンの宿舎を決めるシーンが出てくる。(ホテルの看板には colored とあったので、実は差別されたのは黒人だけでなく有色人種全般だったのだ)。その夜白人専用のホテルでトニーがくつろいでいると電話が入る。ドンが気分転換にホテルを出て街の飲み屋に入ったところ、そこにいた白人客数人から殴る蹴るの暴行を受けていたのだ。そういうのが当時の南部の日常だったのだ。そこをトニーが救う。

他にもドンとトニーの旅行中には、ドンが演奏会場でトイレに入ろうとすると、そのトイレは黒人は使えない、外の廃屋を使うように言われるシーンや、トニーが入るように促した洋服屋で入店を拒否されるシーンが出てくる。また、夜間に二人が車を走らせているとパトカーに止められた。恐ろしいのは、黒人は夜間外出禁止の法があったこと。土砂降りの雨の中にドンが引きづり出されたのをトニーが止めようとして警官と口論になる。警官がトニーを「イタ公」と罵ったことをきっかけに手を出してしまつて二人は逮捕されてしまう。また、演奏旅行最後の日にホテルのレストランで食事を取ろうとするとホテル職員に拒否される。いくら交渉してもここの慣習だとして拒絶される。有名な黒人歌手ナット・キング・コールが故郷のここで舞台に立った時に観客からリンチを受けそうになったエピソードが紹介される。これが当時の人種差別であり、二人が直面した現実だった。

この映画が描く当時の社会のゆがみは人種差別だけではなく、白人であるトニーもまた差別される人々だった。彼はイタリア系移民のアメリカ人だった。当時のイタリア系移民はアメリカ社会ではトニーのように清掃車の運転やクラブの用心棒などの仕事しかなく、小さな家に住み、貧しい暮らしをしている社会の底辺層の人々であり、トニーが警官に浴び去られたように同じ白人からも「イタ公」と呼ばれさげすまれていたのだ。そのために、これはこうした社会の常なのだが、底辺に生きる人々は同族の絆が強いことと、また自分たち以上に差別される黒人(アフリカ系アメリカ人)に対しては自分たちも差別する側に回るといふ社会の構図があったことがこの映画では、冒頭のトニーの一族の会話やトニー家を修理のために訪れた黒人に対する態度や南部旅行の最中にトニーとぼったり会ったイタリア系仲間が黒人との仕事など辞めろと説く場面など、随所に描かれている。

4 映画『グリーンブック』の描く「笑い」

これだけの社会の暗い面を描きながら、この映画は暗くだけならぬたくさんの笑いがあったことが救いだった。

例えば、トニーが50ドルをかけて大食いの競争をする場面。これは負けたらもうなというところで場面が切れて、次の場面で妻に負けたんでしょと言われると勝ったと言い、笑いを誘う。観客に予

想をさせておいて場面を変えて次の場面で予想を裏切り笑わせるという喜劇の手法はこの映画ではかなり用いられていた。クリスマスイブに是非家に帰りたいと願うトニーだったが、余りの疲労に帰宅を諦めて今日はこの辺でと言う場面で切れて、次の場面でなんとドンが運転している。なんだドンも運転できるんじゃないかと笑わせる。ドンの運転のおかげでクリスマスイブに間に合って、トニーが自宅でくつろいでいるとドアを叩く音。観客はこれはドンが来たなと予想すると、実は質屋の夫婦だった。その後、訪ねてきたドンを受け入れたトニーの妻がハグしただけでも驚いたのに、ハグしながらそっとドンの耳元で「手紙ありがとう」と言う。なんだばれてたんだと笑いを誘う。この予想を裏切り笑いに結びつける手法は監督が今までずっと喜劇を撮って来たことと関係があるのだろうか。

他にも笑いはたくさんあった。初めてトニーがドンと対面するシーンではドンが「ドクター」と呼ばれていることからてっきり医者だと思い込むことで笑わせる。また、トニーが運転する車の中でさかんにケンタッキーフライドチキンにむしゃぶりつき、こういったものは食べないドックに、これは旨いからとにかく食べると無理じいするシーンでドンが食べてみると旨いと言うとトニーが誇らしげにするシーンは笑わせるし、食べ終わった骨はどうするのかとドンが訊くところだと窓から捨ててしまうのをあろうことかドンがまねをするのも笑わせるのだが、容器まで窓から捨てるトニーに対し流石にそれはやり過ぎだと引き返して拾わせるのも笑わせられた。しかもその後、トニーの演奏するホテルで歓迎のために出された料理がフライドチキンというのには更に笑わされた。つまり当時の黒人は鳥の唐揚げが大好きという認識が白人たちにあったということ。こうしてこの映画は笑い満載だった。

4 映画『グリーンブック』の描く「友情」

この映画最大の笑いであり、最大の救いは、トニーとドンがどんどん仲良くなり、ついには親友とも呼べるような友情を育んだことだろう。そしてそれがこの映画の核であり、テーマであると思う。

トニーとドンは全く違う正反対の人物として描かれる。トニーは貧しい生活を送る、がさつで野卑でスペルを間違えるような教養が低い人物。しかし人から好かれて人が集まって来る人。ドンは差別を受ける黒人だが、ピアニストとして成功しカーネギーホールの上層マンションの広い部屋で豪華な生活を送る、博士号を幾つも持つほど教養があり、上品な言葉遣いと振る舞いをする人。しかし親しい人がいなくて唯一の家族である兄とも疎遠である寂しい孤高の人。(この二人の人物を二人の役者が非常に巧みに演じきる。アカデミー賞ではドンの役者のみが助演男優賞を得るが、私はトニーの役者も主演男優賞ものだと思う。) トニーとドンの二人は、全く違うキャラクターの上に、トニーは黒人に差別感情を持っているので最初のうちは二人は全くうまくいかない。トニーを雇う前にドンが面接で、「あなたは黒人との仕事は問題ないですか」と言うと、トニーは全く問題ないと答えたが、それは嘘。この前に、トニーの家に修理に来た黒人の口に付けたグラスをゴミ箱に捨ててしまったり、黒人のことを「黒茄子」と言って陰口をきくシーンがある。トニーは、クラブの用心棒の仕事がクラブの改装のため2ヶ月間ないので、その間の生活のために金がどうしてもほしいから仕方なくドンの演奏旅行の運転手の仕事を受けたのである。二人がいよいよ旅に出かける時に、トニーは自分は運転手として雇われたので黒人の雑用などやらないというプライドを持っていて、トニーの荷物を車に載せることは拒否してホテルマンにやらせるというシーンがある。出発してすぐに、ドンが自分の客は上流階級の人が多いので、トニーの言葉遣いを直すように言うと、トニーが慥然とするシーンがある。さらに、トニーのファミリーネームがイタリア系のため発音しにくいので、ドンがそれを短縮して言わ

せようとすることもトニーは拒否する。それはトニーにしたら当然なのだが、ドンとは対立する。ドンがたばこが嫌いでトニーの喫煙を禁じることもトニーには面白くない。さらに土産物屋の店先に商品である水晶やルビーのような石の原石かなんかが落ちてるとそれを拾ってポケットに入れてしまう。それをバンドのトリオの一人から告げ口されたドンはトニーの行為が許せない。それを返せと言って口論になってしまう。トニーにとってドンはあくまで雇い主なので結局は逆らえない。返すしかないが、妻への土産にしたかったのにと腹が立つ。

二人の関係が大きく変わるのは二つの出来事がきっかけになる。一つは、黒人の入れない酒場に入り白人たちに袋だたきにされたドンをトニーが救ったこと。もう一つは、ドンの演奏会でドンのピアノを外で聴いたトニーがあいつは天才だと思いその尊敬の念を妻への手紙に書いたこと。その後ドンはトニーに自分の言うとおりに書けと、トニーの妻への手紙の文章を口述する。これを受け取った妻ドロシーが感激し友人に見せるとうらやましがられるシーンが笑わせる。やがてドンは信頼の証にトニーを運転手兼マネージャーとして、自分の演奏会で司会者に紹介させるようになる。トニーも信頼に応えるようになる。旅行中にばったり会ったイタリア系仲間から、黒人の仕事なんかするな、自分たちが仕事を紹介するからと言われていた時に、それを察したドンが給料を上げるから行かないでくれと申し出ると、大丈夫給料はこのままでも自分は去らないと言うシーンがある。このころのトニーはドンが同性愛者だと知ってもそれを揶揄することはない。さらに、黒人の夜間外出禁止の州でパトカーに止められ、ドンが外にひきづり出されると、こんな雨の中をひきづり出すなど警官に抗議する。自分は外に出されてずぶ濡れなのに。

しかし、この映画はさらに深いものがある。ドンとトニーが警官に捕まって警察に連れて行かれて演奏旅行に穴が空きそうな絶望的な状況になったとき、ドンの機転で弁護士に電話することが認められ、ドンはあろうことか当時のケネディ大統領の弟で司法長官のロバート・ケネディにコネがあって彼に電話して救われた。その後で二人だけになったときに、司法長官に電話して助けて貰ったことを恥じるドンに対し、ドンを慰めるつもりか、トニーが「あんたは黒人と言ってもまだ。偉い人を知っているし、すごい家に住み豪華な生活ができる。むしろ貧乏で虐げられている自分の方があんたよりも黒人らしい。」と口走ると、ドンは怒って車を駐めさせ、雨の中に出ていってしまう。このときドンの「自分は、白人でもないし、黒人でもない。自分は一体何なのだ」という言葉が切ない。確かにこれ以前のシーンで、カーネギーホールでのドンの恵まれた生活と、ピアノ演奏者として喝采を受けるドンと、カラード専用ホテルの前で戯れる黒人たちの中に入って行けないドンと、旅行中に見かけた奴隷解放宣言以前のような状態で農作業をする黒人集団に目を背けるドンの姿が描かれている。

「自分は、白人でもないし、黒人でもない。自分は一体何なのだ」ということが、ドンの深刻な悩みであり、トニーはその琴線に触れたのだ。しかし、ドンはそれを言った後、思い直したかのように車に戻る。そして、その後、トニーとドンは心の奥底からわかり合えたかのような関係になったようだ。

そうこうしている間にいよいよ最後の演奏地に到着。ドンは演奏会場のホテルで表面上は歓迎されたかのように見えたのに、控え室は物置部屋のような所だった。トニーが先にレストランに入ってバンドの他のメンバーと席に着いていると、ドンが入口で入店を拒否される。今まではこんな場合我慢することが多かったドンが今回は入店を強く求めている。それを拒否するホテルマンはトニーを買収してドンを説得させようとする。トニーがそれを拒否すると、ドンは自分をレストランに入れなければ演奏はしないと言う。それは契約違反だとあくまでも入店を拒否するホテルマンに対し、ドンはホテルを出て行こうとし、それにトニーが続く。二人の関係はここまで深まっていたことを知る。その後の展開がこの映画で最も圧巻の場面。二人がホテルの外のレストランに入ったところで、トニーが

自分の連れはすごいピアニストなんだと自慢すると、そこのオーナーらしい女性が、それなら実際に示してくれと言い、店のピアノの指さす。結局トニーに促されてドンはそのピアノで演奏し、ここに来ていた客たちから喝采を受ける。するとそのレストランの演奏者らしい人々が舞台上上がってきてジャズセッションが始まる。本来はクラシック演奏者のドンはジャズセッションのようなことはやらないはずだったのに、ドンの才能はすごいものですぐにセッションはうまく行って盛り上がり、客から大きな拍手が鳴り響く。店を出た後、ドンが「たまにはこういうのもいいな」と言うのに私は嬉しくなった。

結局二人は最後の演奏会には出ず、ニューヨークに向かう。トニーには何とかクリスマスイブには帰宅し、家族・一族とともに過ごしたいという強い願いがある。するとまたパトカーが追いかけてくる。また逮捕かと思っていると、警官が車の後輪のパンクを教えてくれる。予想を裏切りホッとさせるのはここまで何度もみられたコメディの手法だ。タイヤ交換をして再出発したトニーだがもう時間は遅いし、疲れ果ててもう今日中の帰宅は間に合わないと言った。ここで場面が切れると、次の場面でドンが運転していて観客を笑わせるのは前述のとおり。ドンのおかげで帰宅が間に合ったトニーだが、ドンに家に寄って行かないかと勧めてもドンは断ってカーネギーホールの上のマンションの自室に戻る。その後、ドンはホテルマン(召使い?)を気遣い家に帰らせて一人になる。一方トニーの家では家族だけでなく、同族や友人が集まっていてトニーを温かく迎える。そこにドアをノックする音。これはドンかと思うと、質屋の夫婦だったのも前述のとおり。その後のノックでドアを開けると、酒を手にドンが立っていた。トニーがドンを家に招き入れると、そこにいた人々がドンのために席を空けてくれたのは、今までイタリア系移民の黒人に対する反感と差別意識を見せられていただけにホッとさせられた。続いてトニーの妻ドロシーがドンをハグするのに驚くと同時にホッとさせる。そう言えば、ドロシーは、夫のトニーが捨てたグラスを拾った人だし、旅に出るときに夫の分だけでなくドンの分もサンドイッチを作って渡した人だったことを思い出す。その後、ドロシーはハグしながら、ドンに「手紙をありがとう」と夫に聞こえないような小さな声で耳元に囁く。そうか分かっていたのか。笑えると同時にドロシーは素晴らしい人だと思った。そう言えば、夫が旅に出かける前に見ず知らずのドンから妻である自分に、夫に長期間旅に出て貰うことになるが大丈夫かという気遣いの電話があったのだ。あの時、ドロシーはドンという人の人柄を知ったのだと思った。これで、トニーとドンはこの仕事切りで終わりではなく、この後も家族ぐるみで付き合い合っていくのだろうなと予感させる終わり方であった。観客には最高の終わり方だ。なんて素晴らしい映画だ！



旅に出るトニーと見送る妻のドロシー